

啐啄之機そつたくのき

中村 亨

世の都合・不都合

木馬が弧状の脚の上で、調子よく揺さぶられてきて、ご機嫌な振り幅になったと思う途端、ガクツと止まり、危うく頭を握把にぶつけそうになる。上向きに折り畳まれた車輪が、大きな振動にたえきれず前に躍り出て、動揺を急停止させるのだ。独り遊びの場だ。手助けをしてくれる人はいない。仕方がない：私はすじりもじり降りて、車輪をたたみ上げ、懸命に木馬によじ登って、また揺すりだす：調子よく：突然ガクツ！

幾度となくこの事が繰り返されて、幼い意識に強烈に刻印される「不都合」という名の、人の世の障壁。なぜ、この絶好調のときにきまって支障がでるのか。その木馬のあつた住まいから転居したのは、私が満二歳の冬だ。体験だの経験だのという概念も、十分適用できないであろうほど幼い私だ。しかしこの事は、その私の生活史の中でも、最初の問題意識をなした一コマとして記憶に鮮明なのである。

洞察の鋭い人は、ここでの章題との関係をすで見抜かれたであろう。つまり、この世のものの在り方と、人間としての私の在り方の関係（厳め



妻のガン死を機に九大から現職の西南女学院大へ（5度目の職場）。授業分析を中心に講じている。実際に仕事をしたことのない人による形式的なカリキュラムなど、実施過程と内的可能性を視野に置かない計画論はホラ話に近いので、学校教育の現場をその弊害から守ることに力を注いできた。

しくいうならば、地球上の物性を支配する法則性と、私という行動主体の意思との親疎の関わりへの開眼と探索の開始期にあつた幼い私に、しかも、そういった能力発達のごく初期に全く適切な、頻回反復という学習状況で事が起きているのだ。記憶の拠点とその材料の残滓の在り方が、認識の発達の上で有用と考えるならば、教育・学習の在り方の適時性とはこの事だ。

しかしながら、むろんその時期の私は、ここで私が「説明」として構成し直している事柄関係の把握には至らない。都合・不都合という想念の「核」を強烈に記憶に刻みながらも、私の意識は、私の意図と、木馬と、動揺と、車輪とを、バラバラな材料として共に空中に漂うだけだ。

ここで人類史的発展と、個人的発達とを類比的

にとらえる素朴な解釈をあえて援用するならば、例えばごく初期の呪術的想念の共有は、右の事例のように、稀にあり得る場合での、素材の通有性を抽出糾合して、それを抛り所として、成り立つのではないか。しかし、今もその未整理の大部分は残る。「マザーグース」は言語化され、「不思議の国のアリス」は作品化され、その後二十世紀半ばに至って、ピアジェ等によって、この世界の在り方に「二応の」説明概念が付与されてはいるが。

教師への依拠・信頼

『：コウリヤン刈つて広いなあ：』『これはどういう：気持ちなのかねえ、え？：どういう：感じなのだろうかねえ』三嘴喜代松先生は、すこし口ごもり気味に発問した。難しい問いである。国民学校一年生用国語教科書の一節。挿絵には、見渡す限りの地平線に赤い夕日の遠景があつたと記憶している。満蒙開拓団として入植した一家の子どもの詩なのだ。しばらく間が空くが挙手がない。転校したての私が一人、おずおずと手を挙げた。

しかし思う様の言葉が探せない。「何か……ちがうような……感じなんです」。三嘴先生はハタと手を打った「そうだよ！ そうなんだよ、ちがうんだよ、ちがう感じなんだよ」頬が紅潮している（三つつ三嘴、顔真っ赤）。このとき、先生は「……ちがうような感じ」に、おそらくは「異う」の語を充てて聴き取ってくださったのだ。それは、記憶を掘り起こしての今にして、そのように分かってくる。はるばると来た……心許無い……しかし美しい景色……異国情緒……ノスタルジックな……郷愁。それらの事をない混ぜにした感覚。広島県呉市から出るばる藤沢の第一国民学校へ、あたかも転校してきたばかりで、周囲の好奇の目にさらされている私だ。その幼い心細さと二重写しになる感覚だ。一年生の貧しい語彙と表現力は、それを的確には表現できない。先生はそれを、すかさず酌み取ってくださったのだ。私は、その先生の語氣に背中を押され、私自身が何を言いたかったのか、幼稚ながらも理解の底にズンと落ち着くものを得た。そして、人を導くとは、このような事であるときえも。それゆえ、この感覚は、先にもすこし触れ

た通り、記憶に根深い。

これも、まさにその時と場を得た教えの好例である。この場合は、リテラシーの世界への体系的かつ公式的な教育（すなわち初等教育）との出会いの時期と場で、しかも、教師との個人的な接触感を得て成立した学習の例である。

大人の無理会への理解

太平洋戦争末期。国民学校五年、六月末のときだ。半ば、疎開児童の形で江田島の田舎の学校へ転校してきた。「東京者」として周囲から浮き上がったまま、すぐ期末試験に遭遇する。国語は満点。算数は落第点たる五十点。掛け算五題、割り算五題の簡単な試験だ。「割り算が全部できて、なして、こげな、みやすいほうの掛け算がでんのかのう」。向井先生は首をかしげる。「こんなに出来のわるい子とは思わなかったが……！」家では母が暗然たる顔でつぶやく。ところが私には、そのときにも分かっている。空襲で間断する藤沢での教育だったが、割り算は比較的直近の学習で記

銘の間違いはない。しかし掛け算は、子どもの時間にとつてはとうの昔の事だ。桁のそろえ方を忘れていたのだ。現在の私として説明しよう。要するに初等教育でのドリル的な部分は、国語での「書き方」の称呼が代表するように、「やり方」学習なのだ。子どもには、原理的な理解と全く別の所で、孤立したまま技術として成立する。位取りや桁そろえ、十進法の何たるか等の、数理とは全くと言えるほど無関係なのだ。計算等の「コンペ」で優勝する子の内部事情を知れ。

このあたりの問題の実情分析や吟味無しに、現在でも、拙速な学力調査と、低劣な評価が世の「大人」によつてなされる。社会的前提と集団的圧力に依拠したフロントエンド・モデルでの、近代学校教育の前倒しの教育内容の無理と分裂の実態が、それを情性的に進めている大人には把握されていない。むしろ、発達に先んずる一斉教育を「あえて」発案・提唱したコメニウスの、十七世紀の問題意識の段階から想いを立て直せ。

ともかくそのときの私には、大人の「わからなさ」の印象を深くする結果で事は過ぎた。

権力者への不信

その数十日後だ。朝の外掃除の点呼のとき、得体のしれない閃光とそれに続く轟音に驚かされる。広島方面に暗黒の雲が上がる。わずか瀬戸内を隔てるのみだが、幽鬼の如く焼けただれ、両脇を抱えられて帰ってきた数人の人たちによつて、初めて惨状の真相が伝えられた。その早朝、動員学徒として鉢巻とモンペ姿も凛々しく歩調を取り、声を合わせて歌いながら隊伍を組んで出かけて行つた多くの女学生たちはどうなったのか。「高くはためくあの日の丸を、仰ぎ眺める我らが瞳……」と十五、六歳の乙女たちの澄んだ声が今も耳に残る。そのアメリカによつて、民主主義がもたらされた。狡猾な政治家と、傲慢な軍人と、高邁な教育者と、お人好しでいい気な大衆とがサラダボウル状になる大国アメリカからだ。折から青年前期、自らの存念を定立させるべきときの私なのだ。この内部・外部の矛盾葛藤をどう処理するか。そのときの私の密かな方便は、光ある面にのみ力を入

れて目を注ぐことであつた。狡猾からは知恵を、傲慢からは矜持を、高邁からは理想を、お人好しからは友好を学ぶべきだ。しかし、さらにそれらをどのように統一するのか、また欠落部分いかに。その検討作業には当然ながら、権力者批判をも多く含むことになる。例えば、国語学習で、目前楽しみにしていた平忠度（薩摩守）と藤原俊成との別れの一節は、たちまち真つ黒に塗り消され、さらにその教科書自体取り上げられてしまう。これらのことを指令したやから共には、ここにこめられた、美しきものへの哀惜の情などは、到底分らない境地なのだろうと。

この期の激動は、多感の時期の私に、力を持つ者必ずしも真ならずの開眼をもたらした。

宿命と共に生き、さらなる未来を想う

混乱の世俗からの逃避先は音楽であつた。高校の音楽課程を出て、いざ上野の森へ。しかしそのとき、名古屋の父の会社が倒産するという悲運がおそう。東京への遊学などは夢のまた夢となる。

そして、可能性をまさぐりだしての転向先は地元の名大教育学部となる。

ここで大きな出会いに恵まれた。新入生のガイダンスに、教育学部長でありながら「わしは、教育学というのが大嫌いで……」と言い放つた重松鷹泰先生に師事したのだ。これも、このときの私の在り方にまことに適切な巡り合わせの上であつた。当初の志を挫かれての、はぐれた気持ちからは、この先生につくという選びのほかはないと思えたものだ。

しかし、重松先生の意のあるところは「西欧」の文物を鵜呑みにして横文字を崇拝する類いの講壇教育学への批判であり、「君たちは、日本の教育学をつくれ！」というのが真の課題なのであつた。以来、先生の二万点に及ぶ全国的な授業記録の収集と整理に微力ながら参加し、ひたすら「現場」の教師の仕事に参与することで、私の仕事の大半は過ぎた。

講座の助教授は、西田幾多郎氏の孫にあたる教育哲学の上田薫先生で、何も知らずこういった師弟環境に入れたのは、誠に縁とも宿命ともいふべ

き無意味的な成り行きである。

抹香臭い物言いは避けたいが、七十の坂を越えた今、過去を振り返ると、我を囲む大きな流れの中で私は、わずかに許された選択肢の中での一因をなしたに過ぎなかったように思われる。血気盛んな頃は我が道を拓くの意気込みで、事や人とのあれこれを自ら決した如く考えていた。そしてそれはその時期、意欲的に生きるための自己意識の確立、主体的な存在意義の確認の上で、必須のことではあった。むろんあの時代にも、すでにその時代なりの物事が多発していたが、己の在り方を、少なくとも指定し得る、ある手掛かり感を得るだけの物事の限定や安定が身近にあった。意図的な選択行為こそ主体性の立証である。その選択行為を意義付ける場合は、数個の選択肢の場合だと上田先生は説く。

さて、今の子どもたちは、それぞれの必要にして適切な時期に、はたして自己定位を基礎付け実感し得るだけの、安定した人や物の関係を選び取れるのだろうか。彼等、彼女等に数個の選択肢の場が許されているか。往時の状況に比較にならぬ

ほど、今は圧倒的に多くの事件や情報の洪水の中なのである。

直近の物理的経験の事実から発して、社会的な研鑽を積み、人としての一生の目的論に達するには、それぞれの感知能力の発達の曲がり角のときに、適切な要因との出会いの機会が用意されねばならない。禪家ではこれを啐啄之機と。(啐啄同時とも。碧巖録十六)

宇宙時代を迎えるであろうこれからの子どもたちを指導するには、地上の論理から発して、宇宙規模の論理へと原理構造の転換を成し遂げさせねばならぬと説く私の教育原理や方法の講義を、前席で真剣にノートを取る学生には、幾許かの「同機」があるのだろう。後席で居眠りをする学生にも、どこかで、それぞれの生き方に資する経験に恵まれる機会があればよいのだが…。

●中村亨(なかもら とおる)

西南女学院大学教授。九州大学名誉教授。教育と医学の会理事。名古屋大学大学院教育学研究科博士課程修了。専門は教育学。著書に『発言表を使用する授業分析』(日本教育方法学会、一九八七年)、『子どものパラダイム転換の可能性を考える』(文部省研究成果報告書、一九九六年)など。